

横浜市認定歴史的建造物 「関東学院中学校」お別れ会

平成28(2016)年1月23日(土)、24日(日)に関東学院中学校高等学校で「関東学院中学校」旧本館のお別れ会が開催され、旧本館を解体前に一目見ようと、卒業生や市民など2日間で約700名が参加した。

旧本館は、関東大震災後の昭和4(1929)年に、横浜を拠点に活動していた米国人建築家で、関東大震災後の復興を担った人物として広く知られているJ.H.モーガンの設計で関東学院中学部本館として建てられた。旧本館は中世英国のノルマン様式が採用されており、城砦風の塔屋が特徴的であり、平成4(1992)年に横浜市認定歴史的建造物に認定されている。

旧本館を改修保存するため詳細な耐震診断を行った結果、建物の老朽化が著しく一部倒壊の恐れがあることが確認されたため、横浜市や専門家等を交えた委員会、既存建物を活かした耐震補強工事などの検討をしたが、保存修復も非常に困難な状況であることが判明したため、やむなく旧本館の全面解体となった。

お別れ会では、近代建築を中心に歴史的な建造物の調査を数多く手がけてきた吉



田鋼市氏(横浜国立大学名誉教授)による講演会や見学会などを実施。見学会では、関東学院中学校高等学校卒業生やJIA神奈川メンバーによるガイドで、ヘルメットを装着した見学者達は思い思いに見学した。卒業生からは思い出の詰まった旧本館の取り壊しを惜しむ声が多く聞こえてきた。

将来的には、旧本館の特徴的な意匠が承継された建物の建設が予定されており、歴史的景観の復元されることが期待されている。

特定景観形成歴史的建造物制度の運用開始!

横浜市は、平成25(2013)年12月に「横浜市魅力ある都市景観の創造に関する条例(景観条例)」の一部を改正し、横浜市建築審査会の同意を得ることにより、建築基準法の適用除外も可能となる「特定景観形成歴史的建造物制度」を創設した。

平成28(2016)年2月25日に、その制度の適用第1号として金沢区の「旧円通寺



「旧円通寺客殿(旧木村家住宅主屋)」



「旧藤本家住宅主屋及び東屋」主屋

旧川合玉堂別邸(二松庵)庭園、名勝に指定される

横浜市は、横浜市文化財保護審議会(会長:五味文彦氏)の答申を受け、「旧川合玉堂別邸(二松庵)庭園」(金沢区富岡東)を横浜市指定名勝とすることを決定し、平成28(2016)年11月4日告示した。日本画家・川合玉堂が大正6(1917)年10月に建てた別荘(二松庵)につくられた庭園で、地元富岡の庭師、植屋二代目・大胡隆治を起用して作庭された。主屋は平成25(2013)年10月に火災で失ったが、起伏を活かした雑木林や小川の流れ、のどかな海の眺望など、山荘の庭にふさわしく非常に変化に富んだ庭園が残されており、かつての富岡地域が別荘地であった雰囲気

を、庭園をおとして感じることができる。現在、庭園は地域の方々の協力などにより定期的に公開されている。

■庭園公開に関する問合せ
金沢区政推進課企画調整係
電話:045-788-7726



川合玉堂別邸庭園

YOKOHAMA HERITAGE 公益社団法人 横浜歴史資産調査会のとりのくみ

シルクロード・ネットワーク・新庄フォーラム2016を開催

- 日時:平成28年6月25日(土):講演会・シンポジウム・交流会
平成28年6月26日(日):市内の絹文化遺産他の見学会
- 主催:公益社団法人横浜歴史資産調査会、NPO法人街・建築・文化再生集団(RAC)
- 後援:山形県、新庄市、新庄市教育委員会、大日本蚕糸会、さいたま絹文化研究会
- 講演:佐滝剛弘氏(高崎経済大学特命教授) 脇坂隆一氏(国交省東北国営公園事務所長) 武田一夫氏(新庄市教育長) 後藤治氏(工学院大学教授)

シルクロード・ネットワーク協議会を設立した横浜フォーラムから一年、本年は山形県新庄市。「原蚕の社から絹産業遺産の再生・活用・継承を学ぶ」と題し開催。新庄市は、蚕糸試験場(国登録有形文化財)を「原蚕の社」と名付け市民交流拠点

や観光資源として積極的に保存・活用。当日は、秋田県小坂町、横手市、鶴岡市、福島市、前橋市、川崎市、入間市、日野市、横浜市他から絹文化を保全する行政や市民団体の皆様約50名が参加。来年は、福島市で開催。



ニュージーランドホテル新庄での集合写真



あいさつする新庄市長 山尾順紀さん



蚕糸試験場を交流拠点として再生「原蚕の社」

港・鉄道・ヨコハマ プロジェクト 講演会・シンポジウム —鉄道がつなく横浜の歴史と文化—

- 日時:平成28年3月16日(水)
19時~21時
- 主催:公益社団法人横浜歴史資産調査会
- 後援:横浜港さん橋にぎわい創造委員会
横浜コミュニティデザイン・ラボ
- 協力:横浜市都市整備局都市デザイン室
- 講演:小野田滋氏
(公益財団法人 鉄道総合技術研究所フェロー)
- パネリスト:花上嘉成氏(東武博物館名誉館長)
二階堂行直氏(法政大学専任講師)
齊藤大起氏(神奈川新聞社文化記者)
青木祐介氏(横浜都市発展記念館主任調査研究員)
- コーディネーター:米山淳一
(公益社団法人 横浜歴史資産調査会常務理事)



右から、花上、二階堂、青木、齊藤、小野田、米山



東京一横浜港駅間の東横線

横浜の経済・文化の発展に寄与した鉄道にスポットをあて長年市内の鉄道遺産調査を行ってきた。ブックレット・2の発行を機に開港記念会館でフォーラムを開催。当日は約100名の参加があり盛会。小野田氏の講演で港に網の目のように敷設された鉄道が港湾システムの



みなとみらい地区を背景に臨港線を活用したプロムナード「汽車道」を見る。撮影:米山淳一



汽車道の現役時代。横浜開港120周年と横浜商工会議所創立100周年記念列車。昭和55(1980)年撮影:倉野聡

「歴史を生かしたまちづくりファンド」への寄附のお願い

「歴史を生かしたまちづくりファンド」は、皆さまの貴重なご寄付によって成り立ちます。「歴史を生かしたまちづくりファンド」に造成された基金は、歴史的資産等の調査、修理、取得、管理、啓発等に関するプロジェクトに使用いたします。

横浜歴史資産調査会は内閣府認定の公益社団法人であり、免税団体です。「歴史を生かしたまちづくりファンド」への寄附金は、税法上の優遇措置(寄附金控除)を受け取ることができます。詳細は事務局まで

お問い合わせください。
横浜を愛する皆さまのご支援をよろしく
お願いいたします。

- 個人:一口3,000円
- 団体・企業等:一口100,000円
- 振込先:横浜銀行 県庁支店
普通口座 6046423
「歴史を生かしたまちづくりファンド」

【お問い合わせ先】
(公社)横浜歴史資産調査会 事務局
〒231-0012 横浜市中区相生町3-61 泰生ビル405号室
TEL / FAX: 045-651-1730
E-mail: yb-info@yokohama-heritage.or.jp

「歴史を生かしたまちづくり相談室」受付中!! 皆様からのご相談をお待ちしています。
【連絡先】公益社団法人 横浜歴史資産調査会 (ヨコハマ・ヘリテージ) 内
「歴史を生かしたまちづくり相談室」〒231-0012 横浜市中区相生町3-61 泰生ビル405号室
TEL / FAX: 045-651-1730 E-mail: yb-info@yokohama-heritage.or.jp

歴史を生かしたまちづくり

横濱新聞

第32号

平成28[2016]年
11月30日発行

Since 1989



撮影:米山淳一

重文になった20世紀の産業遺産 貨客船 氷川丸

横浜みなと博物館館長 志澤 政勝

20世紀の産業遺産

山下公園地先水面に係留されている氷川丸が、国の重要文化財に指定された。平成15(2003)年には横浜市の文化財に指定されていた。船が重要文化財に指定されるのは極めて稀なことである。そもそも船自体が残っていないからである。木造、鋼製を問わず、船の寿命は短い。近現代に建造された船は、解体、あるいは海外売却され、新造船と交代する。交通史、造船史、海運史上の価値があったとしても、鋼鉄の巨大な構造物を变形させずに残すことは容易ではない。このため特に、大型の船が保存されることは極めて少ないのが現状である。

もう一つの大きな理由は、船だけではなく乗り物が文化財のカテゴリーにならなかったことである。氷川丸以前に重要文化財に指定されたのは、東京海洋大学構内に保存されている明治丸だけである。同船は陸上固定で保存されているため、便宜的に建造物に分類されて指定された。

氷川丸は以下の造船技術史上、近代交通史上等の価値が認められた。①複動大型ディーゼルエンジンや国際条約を先取りした水密区画採用等の先進造船技術導入の貨客船 ②一等船室等のアール・デコ様式の内装が日本に直輸入された最初の建築意匠で、客船内装史上では最初期 ③貨客船が海外との輸送を担っていた20世紀前半の主要航路の北米航路に就航し、戦中は病院船、戦後直後には復員船、引揚船、物資輸送船として社会・経済史上に大きな役割を果たした ④大型貨客船で現存唯一の遺存例。

こうした点は氷川丸の設計、構造上の優秀性に負うところが大きい。当然のことながら氷川丸が生まれ、活動した時代と密接に関係している。

設計、構造上の優秀性

氷川丸は姉妹船日枝丸とともに日本郵船がシヤトル航路用に横浜船渠で建造した貨客船。シヤトル航路は明治29(1896)年に同社が欧州航路とともに開設した。日本の主要輸出品の生糸をニューヨークに運ぶ日本海運の重要航路であった。同時にこの太平洋横断航路は米英の船会社との競争の場であった。世界恐慌の不況下、アメリカのガラ・ラインは1.4万総トン級プレジデント型、イギリスのカナディア・パシフィック汽船は2万総トン級エンプレス型を就航させた。ライバルの快速船に対抗し競争力回復のため、日本郵船はサンフランシスコ航路に1.7万総トン級浅間丸型3隻、シヤトル航路に1.2万総トン級氷川丸型3隻を投入することにした。いずれも経済性に優れたディーゼル船である。氷川丸はデンマークのB&W複動4サイクルディーゼル機関2基採用、出力11,000馬力。最高速力18.38ノット、航海速力は15ノットに改善された。船体は、厳しい冬の時化や波浪の衝撃に耐えられるように頑丈に造られた。また、昭和8(1933)年発効のSOLAS(海上における人命の安全のための国際条約)を先取りして船底を二重にし、水密隔壁・水密扉を設置した。鋼材鋼板はイギリスから輸入した。

シヤトル航路は、サンフランシスコ航路の旅客主貨物従に対し、航路の性格上貨物主旅客従であった。1万トンという大量の貨物が積載できるように、船体中央の機関部の前後に各3か所の船倉を配置し、高級貨物の生糸用のシルクルームも設けられた。船客定員一等79名、ツーリスト・キャビン(二等に相当)69名、三等138名、計286名。浅間丸の3分の1の船客数ではあるが、一等客室はフランスのマルク・シモン社製の最先端のアール・デコ様式の船内装飾が施され、心地よい空間が用意された。一等社交室と中央階段付近をはじめ各所に幾何学模様やジグザグ模様の意匠を今も見る事ができる。

船客設備としては郵便局、無線電取扱所、理髪所、診療所、病室、洗濯所などが置かれた。戦前の優秀船といえば浅間丸型をいうが、氷川丸もこれに劣らぬ優秀な船だったといえる。

激動の昭和史を生き抜く

氷川丸は昭和5(1930)年4月25日に竣工した。全長163.30m、幅20.12m、深さ12.50m、総トン数11621.78トン。5月に処女航海に就いた。寄港地は香港、上海、門司、神戸、(四日市、名古屋、清水^{※旧横須})、横浜、ビクトリア、シアトル。横浜→シアトルを12日間で結んだ。以後、太平洋戦争直前に航路が休止になるまで73航海、約1万人の船客を運んだ。このなかには横浜から乗船したチャップリンもいた。浅間丸のような華やかさはないが、質素でひたすら堅牢、実用的な船だった。

その後は戦争に翻弄される。昭和16(1941)年に外地邦人の引揚船、その後海軍に徴用され特設病院船に改装されて、南洋諸島方面の戦傷病兵の内地輸送。この間、3度の触雷を持ちこたえたのは、二重底と水密区画の効果であり、運ばかりではなかった。戦後、日本に残った外航貨客船は数隻にすぎなかった。氷川丸は復員兵の輸送、一般邦人の引揚輸送に従事した。その後、貨客船に改装して北海道航路で物資や旅客輸送、ついでタイ、ビルマからのコメの積み取り、そして、昭和26(1951)年大改装し北米航路などに就いた後、フルブライト留学生渡航のため再び改装の上、昭和28(1953)年7月28日シヤトル定期航路に復帰した。

船齢30年を迎えた昭和35(1960)年に引退した。太平洋横断254回、船客数は約25,800人に及んだ。県と市の要請もあり、翌年新設の氷川丸観光に譲渡され、海事思想普及の船「海の教室」兼ユースホステルとなった。この時、プロペラと舵は撤去された。みなと横浜の名所として最盛期には年間100万人を迎えたが、次第に利用者が減少し、平成19(2007)年元の船主の日本郵船の手に戻り、船体及び船内を大改装の上、翌年日本郵船氷川丸として再出発した。

建造85年以上の船が保存、公開されているのは希少なことであり、残すためにその時々尽力してきた人々の努力の賜物である。氷川丸は例外的に幸せな船である。

参考文献:日本郵船歴史博物館「重要文化財指定記念まるごと氷川丸展」2016年/日本郵船歴史博物館「氷川丸がイブニング」2011年/郵船「氷川丸研究会編『氷川丸とその時代』海文堂出版 2008年

日吉の森庭園美術館内の主屋と土蔵を、歴史的建造物として認定!

「日吉の森庭園美術館」は、港北区下田町に所在する旧家・田邊家の屋敷地に設立された(現在の所有は、公益財団法人日吉の森文化財団)。

田邊家は、家伝によると三河武士の末裔で初代は江戸幕府直轄領(天領)三十石五人扶持と苗字帯刀を許され、この地の管理を任されたといふ。屋号は「長錠口」といふ。錠口とは、「錠」のかかる部分をいい、それにあたる「門」から玄関までの距離があったことに由来する屋号という。12代目の故田邊泰孝氏の代まで農業を営み、13代目の故田辺光彰氏は彫刻家として活躍し、さらに敷地・建物と光彰氏作品などを公開する「日吉の森庭園美術館」を設立した。現在は当代を中心に地域に関わられた庭園美術館を運営するなど、代々地域に貢献してきた。

主屋は、後世の改修部分が多く認められ、屋根も銅板覆いされているが、銅板内部に旧茅葺をほぼ留め、居室部の間取りも本来の4間取り形式がほぼ把握できる。江戸末期から明治初期の港北区内上層農家主屋が、生活の変化とともに現代に受け継がれ

てきた様子を伝える実例として貴重である。土蔵は、昭和15(1940)年の棟札を有し、その頃の再建と考えられるが、旧家に整備される土蔵の形式(味噌蔵を備えた家財道具収納蔵)を伝える遺構として貴重である。【平成28(2016)年3月に横浜市認定歴史的建造物として認定】

■庭園と文化的施設
屋敷地は、西南から東北へ進む谷戸地に構え、谷戸に沿う道路の東西に有する。このうち道路の西側敷地が主体で、西北側に登る緩斜面の東南側を造成して平場を設け、平場の北寄りの屋敷中央に主屋を南面して構える。主屋の西南に土蔵を東面して配し、屋敷導入口は東南隅に設ける。主屋南面は飛石と芝生による庭を介して南方の流れを持つ池にのぞみ、池尻は導入口脇で落水状に処理する。

したがって導入口から主屋方へ進むと、左手に落水越しに池と庭園・土蔵を仰ぎ見る趣向である。もちろん、地主として農業に従事していた時の主屋前庭は鑑賞専用ではなく、現在のような庭園整備は農地解放後の整備である。さらにその後の

戦中に主屋西側の池を、戦後に主屋南側の池を整備している。ただし、主屋背面・西側面を囲う裏山は、竹藪や雑木林が丘陵の里山風情をよく伝えており、茅葺き主屋(現在銅板覆い)と土蔵にくわえて防空壕跡や古井戸跡などを有し、貴重な歴史的空間



「田邊家住宅(日吉の森庭園美術館)土蔵」



「田邊家住宅(日吉の森庭園美術館)庭園から主屋庭根をみる」

を伝えている。そのため地元小学生が毎年社会科見学で訪れ、かつての農村生活や戦時体験の場としている。

主屋は主に田邊泰孝記念館として古民家空間や民俗資料を堪能する場、屋敷内は里山風情と庭園美と田辺光彰氏の彫刻作品を楽しむ場、さらに主屋東方に新設された田辺光彰彫刻美術館にて彫刻作品が鑑賞できる。

■主屋(田邊泰孝記念館)

主屋は木造・平屋建の南面する建築で、桁行7.5間・梁行4.5間を主体として、南側と西側に3.5尺の下屋、北側に1間の下屋をもうけ、西側面北端に便所を張り出し、さらにその西に来館者用の外便所を新設する。主体部の屋根は寄棟造・茅葺(銅板覆い)で、下屋屋根は瓦棒銅板葺である。建築年は明確ではないが、家伝では「明治5年に失火により母屋を全焼し、土蔵の草屋根を焼失」と伝える。小屋組の部材(追又首)の止釘に角釘が使われているので、明治前半に遡ることは認められてよく、柱他主要古材の様相も、明治5年頃(江戸末期～明治初期・推定)に建築されたものとみて妥当である。

外周の仕上げは、正面居室部と西側面はガラス戸と雨戸(戸袋付)でガラス欄間

を備え、正面土間部分は、西側が腰石張のガラス戸引き分け(ガラス欄間付)で、東側がガラス戸引違(ガラス欄間付)である。正面と西側面の下屋は軒桁に磨丸太(みかきまるた)を用いており、特に土間側の磨丸太は太く見ごたえがある。

■土蔵

土蔵は、主屋の西南に東面して位置する。桁行2.5間、梁行2間、切妻造、木造、2階建の主体部の北面面に桁行12尺・梁行8.3尺の差掛屋根を有する付属部を設けた形式で、主体部は椀葺の置屋根を備え、付属部屋根は瓦棒銅板葺屋根の置屋根を備える。また、主体部正面に設けた下屋(梁行5尺)は瓦棒銅板葺屋根とし、付属部東面に設けた出入口上は銅板葺の庇屋根を設ける。主体部は家財道具や布類の収納、付属部は味噌調味料貯蔵のために用いたものである。

【日吉の森庭園美術館】
 ●ウェブページ/ <http://hiyoshinomori.com/>
 ●所在地/ 横浜市港北区下田町3-10-34
 ●行き方/
 ◎東急東横線・横浜市営地下鉄グリーンライン 日吉駅から、「松の川緑道」を通過して約20分
 ◎東急東横線・横浜市営地下鉄グリーンライン 日吉駅から、東急バス・高田町行またはサンヴァリエ日吉行、バス停「下田地蔵尊」下車、徒歩1分



「田邊家住宅(日吉の森庭園美術館)庭園と主屋」

横浜山手聖公会聖堂 外壁補修現場の技術者向け見学会と歴史を生きしたまちづくりセミナー(第39回)の開催

平成28(2016)年7月16日(土)、横浜山手聖公会聖堂において、「第39回歴史を生きしたまちづくりセミナー～石の記憶～」を開催した。セミナーは3部構成で、はじめに5月24日に開催した横浜山手聖公会大谷石施工現場見学会の報告が、JIA神奈川の笠井三義氏(カサイアーキテクチュラルデザイン代表)からあり、続いて「石の記憶～横浜の歴史的建造物と石」と題して横浜都市発展記念館主任調査研究員の

青木祐介氏が講演した。同氏は、江戸末期から近世、近代に至る段階での横浜における石にまつわる様々な事象が紹介され、いかに近代建築物の用材として石が重要な役割を果たしてきたか、またそれらが関東一円の地、特に栃木の太谷、千葉の房総、相模などから持ち込まれ、様々な用途に利用されてきたかを横浜に残る近代建築に照らし合わせながら語った。

続くパネルディスカッションでは、横浜

歴史資産調査会常務理事・事務局局長の米山淳一によって進行され、パネリスト4名を紹介した。はじめに宇都宮大学准教授・大谷石アカデミー学科指導長の安森亮雄氏、二番目は金谷美術館理事長の鈴木裕士氏、三番目は建築設計事務所を主宰されている建築家の木嶋房由記氏、そして講演者でもある青木氏がコメンテーターとして加わった。安森氏は、地元の太谷石とその取組について、まず大谷石の性質からひととき、細工がしやすいことからくる様々な使われ方などを紹介、大谷石アカデミーを中心に今後の石の発展的な利用方策などへの取組などを語った。そして鈴木氏は、鋸山から切り出された房州石について、現在では採掘されていないが、かつての繁栄状況や現在のまちづくりに向けての取組など、房州石を通じてまちの活性化に努めていることを語った。そして木嶋氏は、



まちづくりセミナーの様子

まちづくりや地域活性化の理念的な活動実践としての取組を「妄想と実践」と題して語った。

そして会場からの質問に応える形でセミナーを進め、コメンテーターの青木氏からは、石の生産地と消費地の関係を重視し、お互い交流を深めていくことこそが有意義ではないかとのコメントがあった。そして最後にコーディネーターの米山が、自身の経験から、「歴史や生活文化を石が繋いできたとも言える。足下の石をもう一度見直して、石に光を当てていただきたい。」と締めくくった。



「横浜山手聖公会」聖堂



「横浜山手聖公会」大谷石施工現場見学会の様子

歴史的建造物の活用広がる

「甦った! ジャパンエクスプレスビル」



「ジャパンエクスプレスビル」外観

「ジャパンエクスプレスビル」(中区海岸通)の外壁が美しく甦った。平成28(2016)年1月から3月にかけて、劣化が進んでいた外壁の二丁掛タイルをピンニング等で改修するとともに、高圧洗浄をかけ、JAPAN EXPRESSの文字もつくり直すことで、往時の雰囲気を残しつつ、美しい姿をとり戻した。

また、4月からは3階に「レンタルイベントスペース&コワーキング イノベーション ビア・ワン」が新たにオープンするなど、歴史的建造物の積極的な活用がなされている。



「ジャパンエクスプレスビル」内部の活用(3階) レンタルイベントスペース&コワーキング イノベーション ビア・ワン <http://www.innovationpier.jp/>

「金沢園でカフェ&ダイニング」

国登録文化財である「金沢園」を保全し後世に伝えていくため、建物の一部を事業者が借り受け、近く宿泊施設としてオープンする予定である。既にその一部をカフェ & ダイニング「はたん」として先行オープンし、好評を博している。

また、長年にわたり親しまれてきた料亭「金沢園」は、一旦、準備期間となっているが、近日中にこの地で営業を再開する予定である。



「金沢園」玄関 カフェ&ダイニング「はたん」 <http://www.casaco.jp/>

このことにより、もともと割烹旅館として多くの宿泊客を受け入れていたという建物の履歴を尊重するとともに、より多くの方々にその歴史が知られ、利用されることが期待される。

「西区東ヶ丘の地域交流拠点「カサコ」がリニューアル」

京浜急行日ノ出町駅の近く、西区東ヶ丘の坂の上にある築60年を超えた2階建ての長屋が多世代・多国籍の交流スペース「カサコ」として平成28(2016)年4月9日にリニューアルオープンした。

世界中を旅し、人と人とがリアルな場で繋がることの大切さを実感したメンバーを中心に、建築家などがチームを組み、カサコプロジェクト実行委員を組織、平成27(2015)年10月から「ヨコハマ市民まち普請事業」の助成を受けリニューアルをはじめ、地域住民の協力を得ながら完成した。

軒下の石畳には、横浜市中心図書館前の野毛坂に敷き詰められていたピンコロ石が再利用された。石材は、野毛坂のアスファルト舗装化で取り壊された際に横浜市から譲り受けたもので、一つ一つハンマーで形を整えた約2千個を手作業で敷き詰めた。2軒の長屋を1つにつなげた1階には、カフェや子どもたちの放課後の居場所、ギャラリー、オフィスなどがあり、2階には留学生の短期滞在用のホームステイレー



「カサコ」 <http://casaco.jp>

ホテルニューグランドがリニューアルオープン

横浜を代表するクラシックホテル「ホテルニューグランド」本館の耐震改修工事が完了し、平成28(2016)年10月4日にリニューアルオープンした。横浜市認定歴史的建造物であり、経済産業省の近代化産業遺産にも認定されている本館建物は来年で90周年を迎える。



「ホテルニューグランド本館」レインボーボールルーム

建物の価値を「100年先、次世代へ受け継ぎたい」という思いから、開業した昭和2(1927)年当時の意匠や雰囲気はそのままだに、耐震性を高めた。特に本館ロビーとレインボーボールルームは、日本初の漆喰天井の補強改修

工事であった。リニューアルオープンに先立ち、内覧会が開催され、関係者を含め多くの招待客が訪れ、内部を見学した。

歴史を生きさせ! リノベーション助成と「ふるさと納税」

横浜市は「歴史を生きしたまちづくり要綱」等を改正し、歴史的建造物のリノベーションを支援する中間支援団体の活動に対する助成制度を創設した。歴史的建造物を活用したカフェやギャラリーなどへのリノベーションの需要が高まることも、「歴史を生きしたまちづくり相談室」に寄せられる、歴史的建造物の活用に関する相談が増加したことを受け、横浜市歴史的景観保全委員の意見なども踏まえ創設したもの。

財源には平成28年度から「ふるさと納税(横浜サポーターズ寄附金)」のメニューに加えた「歴史的景観保全活用事業」に寄せられた寄附金を充当する。助成対象となる団体は、歴史的建造物の保全に取り組んでいる公益社団法人等。助成率1/2、助成限度額は500万円。都市デザイン室で随時相談を受け付けている。

「ふるさと納税(横浜サポーターズ寄附金) 歴史的景観保全活用事業への寄附のお願い」

- 横浜市民でも寄附ができます。
 - インターネットを利用したクレジット払いもご利用いただけます。
 - 寄附をしていただくと税制上の優遇措置が受けられます。
 - いただいた寄附は歴史的建造物の保全活用のための補助等に使われます。
- ※詳しくはホームページのご案内をご覧ください。

横浜 ふるさと納税 歴史

<http://www.city.yokohama.lg.jp/toshi/design/m09/kifu/>

LED化進む! 横浜のライトアップ

平成28(2016)年10月、横浜指路教会 役所別館などが既にLEDに更新している。今後もLED化は進むだろう。

部分を除く)。夜の街に建造物等を浮かび上がらせるライトアップに使われてきたのは、これまではメタルハライドランプが主流だった。しかしながら、近年は維持管理費の経済性や省エネルギーの観点からLEDが主流に取って代わり、高性能・低コストの投光器が開発され次々と新製品がでている。横浜の歴史的建造物では、横浜山手聖公会、三井住友銀行横浜支店、旧神奈川労働基準局(中区



「横浜指路教会」LEDに更新された外観